―活動報告―

東北地方太平洋沖地震に対する三郷市医師会の対応
死体検案に従事して

森野　一英*
三郷市医師会，埼玉

How Did We Behave at the North-east Coast Earthquake and Tsunami as Misato City Medical Association: Experience of Postmortem Inspection

Kazuhide Morino
Misato City Medical Association, Saitama

3月11日の震災発生からそろそろ半年が経とうとしています．あの3月の東北の冷たい海水につかって亡くなられた方々のご遺体の検案を底冷えのする，あの石巻総合体育館で行った日々も遠ざかろうとしております．決して忘れられないあの事実をまたマスコミなどには出てこない真の姿を，直後のやや浮き足立った状態から少し落ち着いた冷静な状態になったところで私どもの行動について自戒をこめて振り返ってみたいと思います．

発災直後から私は，三郷市医師会として医療支援チームを派遣すべきであると決断しました．医師会単独では災害直後の三陸に入ることは困難であると考え，消防本部に同行を要請しました．消防とは三郷市防災医療協議会という組織をつくり，10年以上前から年に5〜6回は集まり顔合わせをしてきておりましたので，医師会が出るなら快く支援チームを派遣しましょうとの返事をいただきました．

3月14日から準備を始め，3月15日には準備完了し，宮城県医師会と連絡をとり派遣要請のお返事をいただきました．当初は宮城県医師会に向かって欲しいとの連絡でしたが，出発間際に受け取った正式文書には石巻警察署に向かい検死に当たって欲しいとの記載がありました（注1）．それでも用意した医薬品，注射器などと水，食料を屋外野営用テントなどとともに消防の4tトラックに満載し，医師会所有のワンボックスカー，および個人所有のハイブリッド車の合計3台の車列を組んで，午後6時半に三郷市消防本部を出発しました．東北自動車道は一般車はもちろん通行禁止でしたが，各種の緊急車両が全国から集まってきており，蓮田サービスエリアで休憩したときは消防車両が集結しており結構大勢の方が休息しておられました（注2）．10分ほどの休憩をとった後再び東北道を北上，福島県を抜ける頃から徐々に道路の陥凹が目立つようになり，小さな亀裂が入っているのが分かりました．もちろん路側の灯火は無く漆黒の闇に小雪がちらつく悪条件の中，仙台にたどり着きました．仙台から三陸道へ向かおうとしたのですがここで道に迷い数時間を浪費し，結局夜明けになって東松島の自衛隊基地前を通過しました．石巻警察署には3月16日，午前7時20分に到着しました．

到着後約1時間休憩した後早速遺体安置所である石巻総合体育館に移動し，検死作業に従事することとなりました．御遺体の数は約300体．ぎっしりと並べられた様子は，隣同士手をつないでいるように見えるほどでした．そこへ足を踏み入れた瞬間の衝撃は，今も脳裏を離れません．御遺体はすべて大変きれいな状態で見たところ外傷などはまったくなく，中には死後の反応と思われますがほんのりピンク色の顔をしている御遺体もありました．検死作業の実際は警察が行います．並べられた御遺体を順番にはじから作業場所に移動し，写真撮影を行い，顔写真を撮り，服を脱がせて同じことを繰り返し，ポケットの中や持ち物から身元

*日本医科大学昭和52年卒業
Journal Website（http://www.nms.ac.jp/jmanms/）

が分かりそうなものを探し，財布を持っている方はその中身をすべて並べてこれまた写真撮影して保存します．想像してみてください．あの冬の三陸地方の方がどれほど厚着をしているか，そしてそれが海水につかったとき，どれほどの重さになるかを．この御遺体の搬送作業だけでもどれほど体力を使い疲労するかを．この作業が昼休みのごく短時間を除き終日繰り返されるのです．私たちの仕事は，この作業の立会いと死体検案書の作成でした．また身元不明者の後のDNA鑑定のための心臓血採取です．心臓穿刺は生きている方は普通に刺せるでしょうが，異常な亡くなり方をされた場合発見されたときの遺体の向きで若干位置がずれるため，そう簡単な作業ではありませんでした．小さな子供の心臓血採取は最もつらい思いをしました．検死作業が終わると，着衣や靴などの大きな品物は大きなビニール袋に，財布や指輪，携帯電話など貴重品や小物，身元判明の手がかりになりそうなもの，心臓血は小さなビニール袋に入れられ，棺の上に一輪の花とともに置かれてゆきました．到着当日としては医師3名で約30～40体の検死を終えたと記憶しています．夜は野営覚悟で出発し，その用意もあったのですが石巻市のご好意で体育館の一室をお借りすることができたので寒さをしのぐには十分でした．

翌17日早朝，隣の女川町で検死医が不足しているということで，私を除く医師2名と救急救命士3名は警察車両でそちらに向かいました．そういったわけで石巻の検死は私ひとりとなりました．昼前にお一人地元の医師が来て，私が仕事をしているのをみてご自分も被災しておられるということで帰ってゆかれました．この頃になると身元の判明した御遺体を引き取りにみえる方々が体育館に入ってこられることが多くなり，生死を分けた方々の再会の場となってまいりました．あちこちから嗚咽，すすり泣きが上がるたびに感情を押し殺しての作業を続けました．また時折余震がきて，体育館の検死場所のすぐそばでも壁が崩れ落ちてきたりして危険な状態でしたが，警察の方も私たちもみな慣れっこになってしまって，誰ひとり気にする様子はございませんでした．この日の検死は夜間に及びました．女川町に行った仲間たちも夕方には帰っておりましたが，どうしてもその日のうちに検死を終えた御遺体で身元が判明している方が最後に検案書のできるのを待っておられたからです．その御遺体は母娘3人が車の中で亡くなっておられるのを同時に発見され搬送されてきていたのです．こういったケースはいくつかありましたが，一家で発見されたケースは私にとってはじめてでしたので，何とかそこまでは終わらせたいとの思いが強かったのです．そこまで終わらせたのが午後8時を過ぎていたと思います．検案書の内容は一律です．死亡時刻は3月11日午後4時頃，死亡原因は東北地方太平洋沖地震による津波の被災，溺水による窒息死と記載しました．一枚一枚の死体検案書がそれぞれの方の人生を終える最後の書類と思うと心を込めて書き，間違えたところは訂正印でなく最初から書き直しました．それでも御遺族の中には三郷市という聞きなれない土地の医療機関が発行した検案書に納得がいかないのか，市の職員や警察の方に問い詰めている姿も目の当たりにしました．この日私が作成した検案書はおそらく100通に上ると思います．女川に行った人の話では女川町も壊滅的な被害を受け，15mの丘の上にそびえたつ女川町立病院も1階部分は水につかり，2階でかろうじて外来業務を行っているとのことでした．また遺体安置所と検案所の距離が長く御遺体の搬送に苦労したとの報告がありました．

写真1　3月18日撮影．帰還直前の石巻体育館

3月18日．消防隊は女川町に残してきた医師1名を迎えに出発．私と同行の医師との2名で朝から検死作業を開始しました．午前10時頃になり石巻総合体育館での検死作業をほぼ終える頃になって，青果花卉市場に沢山の御遺体が運び込まれているとの情報が入りました．私たちもそちらに移動しようかと考えましたが，そちらにはすでに宮城県医師会，東北大学，札幌医大などの法医学の専門家が入っているとのことだったので，われわれの任務は終了したものと判断し，三郷市消防本部から撤退命令（注3）が出ている救急救命士とともに帰途に着くこととしました（**写真1**）．石巻総合体育館12時06分出発．午後6時30分丁度に計画停電真只中の三郷市消防本部前に帰着しました．本部では透光器で明々と照らされた中，市長はじめ関係者の出迎えを受け任務を無事完了しました．

（注 1）初めから死体検案であるとわかっていながら必要な器具の用意をしていかなかった．三郷市の警察に問い合わせても何が必要かはわかったはずで，今回は心臓血採取用のカテラン針が不足していた．

（注 2）各地から派遣された消防隊初め支援車両はここで明るくなる頃に被災地に入るための時間調整であったものと思慮される．被災地での移動は明るいときでないと大変危険である．今回われわれが車 3 台とも無事で帰れたことは奇跡に近い．

（注 3）三郷市消防本部では今回のような過酷な任務は原則 3 日間に限るという規定があるとのことです．

今思うと前述の反省点を含めかなりむこうみずな行動もあったように感じますが，死体検案という地味な仕事ではありましたが誰かがせねばならない仕事であり，また地元の先生方は被災された方と顔見知りであったりすることも多く，よそから入った私どものようなチームがこの役割を果たしたことも現地の医療関係者，警察，市役所，被災された方々には少しは貢献できたものと思っています．

あれから 4 カ月が過ぎた 7 月 16～18 日にあらためて被災地を回ってまいりました．南三陸町，女川町，石巻市，そして私たちが働いた体育館も見てまいりました（**写真 2**）．遺体安置所としては 3 月いっぱいでその使命を終わり，その後は支援物資の貯蔵庫として，また自衛隊の方々が駐屯されたとのことでした．復興に向けた歩みが始まっている現実を見て自分として何となく吹っ切れないものを抱えてこの何カ月かを過ごしていたのだとこの体育館の今の姿をみて，後になって気がつきました．私に限らず被災直後の悲惨な状況を眼のあたりにした方々は是非もう一度現場に戻り，少しずつでも復興してゆく様子をみることが，心の支えになってゆくものです．

写真 2　7 月 17 日撮影．支援物資の集積所の使命も終わろうとしている．

この震災の惨状は決して忘れることができませんし，また忘れてはならないことと思います．そして若い医師や医師を目指す人たちは，地元の人から多少迷惑と思われても，とにかくこの現状を見ておくことをお勧めします．人生観が変わります．（8 月 30 日記）

（受付：2011 年 8 月 31 日）
（受理：2011 年 9 月 8 日）